

# 古ウイグル語行政命令文書に「みえない」ヤルリグ

松 井 太

## はじめに

西暦13～14世紀のモンゴル帝国時代においては、モンゴル皇帝（qayan > P. qān ~ qā'ān）やモンゴル皇族・后妃さらには皇族以外の將相や宗教権力者が發した命令が、モンゴル支配地域の各地で遵守すべき規範・法源として大きな權威を持っていた。これらの命令のうち、モンゴル皇帝（世祖クビライ以降の大元ウルス皇帝を含む）が發したものはモンゴル語でジャルリク（jarliq）あるいはテュルク系諸語でヤルリグ（yarliq）すなわち「おおせ」と稱された。これは、その他の皇族・將相らの命令をさすモンゴル語が等しく üge「ことば」とされたのとは對照的であり、唯一至上の最高君主としてのモンゴル皇帝の命令が特別・絶大な權威を持っていたことを示す〔杉山 1990, 1 = 杉山 2004, 372–373〕。ただし、このような原則は、特にモンゴル帝国が分權化していく14世紀後半には、嚴格には遵守されなくなっていったとも考えられている。

そこで本稿では、モンゴル支配下ユーラシアの中央域に位置する東トルキスタン・トゥルファン地域發現の古ウイグル語行政命令文書を題材として、この「おおせ」をさすテュルク語・ウイグル語のヤルリグ（yarliq）が「みえない」ことから、逆説的にモンゴル皇帝に歸せられる「おおせ（jarliq ~ T. yarliq）」の不可侵性と、それらの文書の歴史的背景について検討するものである。

## 1. モンゴル時代の諸種文書の冒頭定式にみえるジャルリク・ヤルリグ

モンゴル語ジャルリク（jarliq）「おおせ」は、モンゴル皇帝が發した命令文書において皇帝の命令の呼稱として用いられるだけでなく、皇帝以外のモンゴル皇族・將相・行政機關が發行者となる文書の冒頭定式における權限附與文言（*Intitulatio*）においても、「皇帝のおおせにより（qayan-u jarliq-iyar）」という文言で用いられた。同時代の漢文編纂史料や出土文書に頻見する「皇帝聖旨裏」は、この漢語譯である。以下に、同時代のモンゴル語文書の用例を掲げておく。

①敦煌北區出土、14世紀後半(?) モンゴル語文書 B163: 46

<sub>1</sub>qayan-u jarly-iyar <sub>2</sub>arka'siri-yin lingji-(b)[er] <sub>3</sub>čautauš[i-yin noyad üge manu?]

「皇帝のおおせにより、アルカシリの令旨（lingji < Chin. 令旨）により、[われら] 招討司 [の

ノヤンたちのことば(?)」]<sup>1</sup>

- ②敦煌(?)發現, 14世紀後半モンゴル語文書, 京都・藤井有鄰館 No. 4

<sub>1</sub>qayan-u jarliy-iyar <sub>2</sub>sultanš-a si-ning ong-un <sub>3</sub>ongvuu-yin noyad-ta <sub>4</sub>buyanquli üi-uu si-ning ong-un  
<sub>5</sub>vuu-üi sun-g? günsi bič[i]g ögümü

「皇帝のおおせにより, スルタン=シャー (Sultanš-a < Sultān Šāh) 西寧王の王府のノヤンたちへ。  
ブヤンクリ威武西寧王の府尉 (または傳尉) スン (?) =ギュンシが書状を送る」<sup>2</sup>

- ③内蒙古カラホト (Qara-Qota) 出土モンゴル語文書 F9:W31b [吉田・チメドルジ 2008, 72]

<sub>1</sub>qayan-u jarly-iyar <sub>2</sub>qong tays-i-yin lingjiber <sub>3</sub>(I)šin-e luu sunggon vuu-yin noyad üge manu

「皇帝のおおせにより, 皇太子 (qong tayzi) の令旨 (lingji) により, われら亦集乃路總管府の  
ノヤンたちのことば」

- ④トゥルファン出土モンゴル語文書 MongHT 073 [BT XVI, Nr. 73]

<sub>1</sub>qan-u jarliy-iyar <sub>2</sub>bigtemür üge manu

「皇帝のおおせにより, われらビグ=テムルのことば」

以上, ①②③は, その出土・發現地に鑑みて, 大元ウルス支配下で發行されたことは確實である。いずれも, 文書冒頭の「皇帝のおおせにより (qayan-u jarliy-iyar)」という定型文言により, 自らの依據する權威がモンゴル皇帝であることを示している。また④は, 従来, 14世紀以降に中央アジアを支配したチャガタイ=ウルス (いわゆるチャガタイ=ハン國) 發行文書とみなされているが, その發行者ビグ=テムル自身は大元ウルス皇帝の權威を認めていた可能性が高い [cf. 杉山 1987, 47, 杉山 1990, 1 = 杉山 2004, 365, 394]

その一方で, チャガタイ=ウルスが發行したモンゴル語命令文書の冒頭定式の權限附與文言には, モンゴル皇帝の命令に限定されるはずの「おおせ (jarliy)」の語を, チャガタイ家王族に對して用いる例が3點ある。

<sup>1</sup> 嘎日迪 2004, 411–412; 敖特根 2006 = 敖特根 2010, IV。第2行冒頭の人名を, 嘎日迪は Qarajaširi と判讀したが, 敖特根は Aratnaširi と改めて東方チャガタイ家出身の豫王アラトナシリ (阿剌忒納失里 < Aratnaširi < Skt. Ratnaśrī) に同定した。しかし筆者は, 2013年12月に敦煌莫高窟研究院に保管される原文書を實見した結果, 本文のようにアルカシリ (Arka'siri ~ Arkaširi < Skt. Arkaśrī) と改め, 敦煌に據った西寧王家の後裔として洪武二十四年 (1391) に明に來朝した「蒙古王子の阿魯哥失里」[cf. 杉山 1982 = 杉山 2004, 272–274] に比定することを提案する。また, 嘎日迪・敖特根とも, このモンゴル王族を本文書の發行者とみなしている。しかし, 第2行の令旨 (lingji) の後には語頭の B- 字の殘畫がわずかに確認でき, 後掲③の用例と比較すれば -ber を推補できる。また第4–7行の行頭が第3行の「招討司 (> M. čautauš[i])」よりもさらに低く「降格」されているため, 本文書は, この「招討司」の關係者により, その下級・下位の機關に宛てて發行されたものと考えられる。「招討司」に後續する破損缺落部分は, やはり後掲③を參考にしてからに補ったものである。

<sup>2</sup> Franke 1965; Ligeti 1972, 235–236; 杉山 2004, 282。文書の年代はスルタン=シャー西寧王の受封以降に限られ, それは早くとも1353年より後のこととなる [杉山 1982 = 杉山 2004, 272]。従来, 本文書はトゥルファン地域のトコク (吐峪溝) 出土と考えられてきたが, ハミ (哈密) に據る威武西寧王家の王府から敦煌の西寧王家に宛てて發行されたものである以上, 敦煌發現資料とみなされるべきである [松井 1997, n. 13; 松井 2008b, fn. 3]。

- ⑤トウルファン出土, 1338年モンゴル語文書 MongHT 074 [BT XVI, Nr. 74]

<sub>1</sub>yisüntemür-ün <sub>2</sub>jarly-iyar <sub>3</sub>temür satılmış ekiten <sub>4</sub>toyačin šügüsüčin üge <sub>5</sub>manu

「イスン=テムルのおおせにより, われらテムル(と?)サティルミシュを頭とする會計官たち(toyačin)・糧食管理官たち(šügüsüčin)のことば」

- ⑥トウルファン出土, 1368年モンゴル語文書 MongHT 068 [BT XVI, Nr. 68; cf. 松井 2008a, 18]

<sub>1</sub>ilasqoǰa-yin <sub>2</sub>jarly-iyar <sub>3</sub>kedmen bayatur üge manu

「イルヤス=ホージャのおおせにより, われらケドメン=バートルのことば」

- ⑦敦煌北區出土, 14世紀後半, モンゴル語文書 B163:42 [松井 2008b]

<sub>1</sub>[ ](....)boladun <sub>2</sub>jarly-iyar <sub>3</sub>k[e](d)men bayatur üge [manu]

「……=ボラトのおおせにより, [われら] ケドメン=バートルのことば」

⑤のイスン=テムル(Yisüntemür)はチャガタイ=ウルス當主(r. 1338–1339)<sup>3</sup>, ⑥のイルヤス=ホージャ(Ilasqoǰa < P. Ilyās-Ḥwāǰa)もやはりチャガタイ=ウルス當主(r. 1363–1370)である。⑦の「……=ボラト([...]Bolad)」は文書の破損缺落により判然としないが, その發令者ケドメン=バートル(Kedmen-Bayatur)は⑥の發令者と同一人物である。従って, ⑥にみえるイルヤス=ホージャと同様, 14世紀初頭にチャガタイ=ウルスを再興したドゥア(Du'a, r. 1282–1307)の家系に連なるチャガタイ王族と考えられる[松井 2008b, 27]。

さらに, チャガタイ=ウルスやフレグ=ウルス(いわゆるイルハン朝)が發行した行政文書の権限附與文言では, このモンゴル語 .... jarly-iyar「~のおおせにより」をテュルク語化した .... yarly-ın-din「~のおおせにより」という表現を, モンゴル皇帝以外の君主に用いる例が確認される。

- ⑧トウルファン出土, 西暦1302年(または1290年)ウイグル語文書 \*U 9168 II [松井 2008a; cf. VOHD 13, 22, #272]

<sub>1</sub>tuu-a yrly-ın-din <sub>2</sub>[t](ü)män sözüm

「ドゥアのおおせにより, 私テュメンのことば」

- ⑨西暦1293年, ペルシア語文書 [Soudavar 1992]

<sub>1</sub>[Irīngī]n Durǰī yarlıǰıǵındin <sub>2</sub>Šiktūr Aqbūqā Ṭagāǰār sūzındin <sub>3</sub>Aḥmad šāhib dīwān sūzī

「[イリンチ]ン=ドルジのおおせにより, シクトウル(Šiktūr < Šigtūr)・アク=ブカ(Aqbūqā < T. Aq-Buqa)・タガチャル(Ṭagāǰār < Ṭayačār)のことば(sūz < T. söz)により, アフマド財務長官のことば」

<sup>3</sup> このイスン=テムルについて, 杉山正明は同名の第10代モンゴル皇帝の泰定帝に比定する可能性を示唆するが[杉山 1990, 1 = 杉山 2004, 394], これをチャガタイ=ウルス當主とみなした L. V. Clark の説は鐵案である[Clark 1975]。

- ⑩アルダビール（Ardabīl）發現，西暦1305年ペルシア語文書 [PUM, Urkunde V]

<sub>1</sub>tawakkaltu ‘alā’llāh <sub>2</sub>Ūlgāytū sultān yarligīndīn <sub>3</sub>Qutluğ Šāh sūzī

「神に歸依す。オルジェイトゥ＝スルタンのおおせにより，クトルグ＝シャーのことば（sūzī < T. sözi）」

- ⑪アルダビール發現，西暦1305年ペルシア語文書 [PUM, Urkunde VI]

<sub>1</sub>bi-ism allāh al-raḥman al-raḥīm <sub>2</sub>Ūlgāytū sultān yarligīndīn <sub>3</sub>Qutluğšāh Čübān Bülād Ḥasan Sawinč sūzīndīn <sub>4</sub>Sa’d al-Dīn sūzī

「慈悲深く慈愛あまねき神の御名において。オルジェイトゥ＝スルタンのおおせにより，クトルグ＝シャー・チョバン（Čübān < M. Čoban）・ボラド（Bülād < M. Bolad）・ハサン・セヴィンチ（Sawinč < T. Sävinč）のことばにより，サアド＝アッディーンのことば」

- ⑫アルダビール發現，西暦1321年ペルシア語文書 [PUM, Urkunde VIII]

<sub>1</sub>Abū Sa’īd bahādur ḥān yarligīndī[n] <sub>2</sub>Čübān sūzī

「アブー＝サイード＝バートル＝カンのおおせにより，チョバンのことば」

- ⑬アルダビール發現，西暦1323年ペルシア語文書 [PUM, Urkunde IX]

<sub>1</sub>al-musta‘ān huwa’llāh ta’ālā <sub>2</sub>Abū Sa’īd bahādur ḥān yarligīndī[n] <sub>3</sub>Dimašq Ḥwāğa sūzī

「至高なる神の庇護 [により]，アブー＝サイード＝バートル＝カンのおおせにより，ディマシュク＝ホージャのことば」

- ⑭アルダビール發現，西暦1342年ペルシア語文書 [PUM, Urkunde XIV]

<sub>1</sub>bi-ism allāh al-raḥman al-raḥīm <sub>2</sub>Sultān Sulaymān yarligīndī[n] <sub>3</sub>Šayḥ Ḥasan Čübānī sūzī

「慈悲深く慈愛あまねき神の御名において。スルタン＝スライマンのおおせにより，チョバン家シャイフ＝ハサンのことば」

⑧に言及されるドゥア（Tuū-a ~ Duu-a ~ Duwa ~ Duḡa）は14世紀にチャガタイ＝ウルスを再興したドゥアその人である。この⑧文書は，ドゥアの在位時代に，チャガタイ＝ウルスが東部天山地方のウイグル王國領をいったん直接支配下においた時期があったことを示す [松井 2008a]。

一方，⑨～⑭は，フレグ＝ウルス支配下で発行されたペルシア語命令文書の冒頭の権限附與文言である。アラビア語の定型句で始まる⑩⑪⑬⑭を含め，いずれもアラビア字表記のテュルク語 .... yarligīndīn (< T. yarlıy-īn-dīn) 「～のおおせにより」という定型表現が，⑨ではイリンチン＝ドルジ ([Irlīngī]n Durḡī < M. Irinčin-Dorji) すなわちキカトゥ (M. Kiqatu ~ \*Kiqa’atu ~ \*Kiqayatu > P. Kīḥātū, r. 1291–1295)，⑩・⑪ではオルジェイトゥ (Ūlgāytū < M. Ūljeitū, r. 1304–1316)，⑫・⑬ではアブー＝サイード (Abū Sa’īd > M. Busayid, r. 1316–1335) ら歴代のフレグ＝ウルス當主に用いられている。⑭スライマン (Sulaymān, r. 1338–1353) はフレグの後裔で，チョバン朝の傀儡君主であるから，立場上はフレグ＝ウルス當主に準じるものである。

これまでに知られている限り，チャガタイ＝ウルス・フレグ＝ウルスとも，その當主自身が発行

した命令文書では、いずれも自らの命令を「ことば (M. üge)」と稱しており [BT XVI, Nrn. 70, 71, 72, 75, 76; Pelliot 1936; Mostaert / Cleaves 1952; Cleaves 1953; Mostaert / Cleaves 1962; Ligeti 1972; Tumurtogoo 2006; Tumurtogoo 2010], 彼らがモンゴル皇帝の權威を承認していたことがうかがえる [杉山 1990, 1 = 杉山 2004, 393–394]。これに鑑みれば、モンゴル皇帝ではなくチャガタイ=ウルス・フレグ=ウルスの當主に M. *jarlıγ* ~ T. *yarlıγ* 「おおせ」の語を用いる上掲⑤~⑭の權限附與文言は、唯一至上の存在としてのモンゴル皇帝の權威を侵犯するものとみなされ得る。

この點に關して、14世紀初頭にチャガタイ=ウルス當主エセン=ブカ (Esen-Buqa, r. 1310–1318) の使節と、大元ウルスの部將トガチ (Toyači > 脱火赤 / 脱忽赤) のあいだで起こった口論を伝える、ペルシア語年代記『オルジェイトウ史』の一節は重要である [TU, 224b8–11]。

會談の際、(エセン=ブカの) 使臣たち (*ilčiyān* < *ilči* < T.-M. *elči*) は「エセン=ブカ (*Īsānbūqā* < Esen-Buqa) の“おおせ (*yarlıg* < T. *yarlıγ*)”は然々である」と言った。トガチ (*Tūgāči* < M. *Toyači*) はこれに聲を荒げて「黙れ (*ḥamūš*)! “おおせ”とは皇帝 (*qān*) からするものである。王子たちの命令 (*farmān-i pisarān*) は“令旨 (*līnkǝi* < M. *lingji* < Chin. 令旨)”すなわち“王子たちの命令”と言うのだ」と言った。(使臣の一人) タルテムル (*Tāltīmūr*) は「エセン=ブカは(チンギス=カンの) 子孫 (*ūrūg* < M. *uruy*) であるから、我々にとっては皇帝と同じだ」と言った。

この一節からは、大元ウルスの將相が「おおせ (T. *yarlıγ* ~ M. *jarlıγ*)」の語をモンゴル皇帝の命令に限定して用いるべきことを嚴格に認識していたのに對して、チャガタイ=ウルスの臣僚は、自身が直接に仕えるチャガタイ=ウルス當主の命令をしばしば「おおせ (T. *yarlıγ* ~ M. *jarlıγ*)」と稱していたという状況が推測される。これは、チャガタイ=ウルス當主に「おおせ」の語を用いる、上掲⑤~⑧の諸例を傍證するものといえる [松井 2008a, 15; 松井 2008b, 27–28]。

また上掲『オルジェイトウ史』の著者カーシャーニー (Abū al-Qāsim Qāṣānī) はフレグ=ウルス宮廷に仕えた史家であるから [大塚 2014], フレグ=ウルスでも「おおせ (P. *yarlıg* < T. *yarlıγ* ~ M. *jarlıγ*)」がモンゴル皇帝の命令に限定される呼稱であることは熟知されていたはずである。しかし、⑨~⑭の諸例は、フレグ=ウルスの將相・臣僚も、自身が直接に仕える君主の命令を「おおせ (P. *yarlıg* < T. *yarlıγ* ~ M. *jarlıγ*)」と稱することを忌避しなかったことを示す。さらに、フレグ=ウルス當主の命令について *ḥukm-i yarlıg* 「おおせ (ヤルリグ) の命令; 敕令」などと表現する例は、上掲⑨~⑭を含むペルシア語行政文書や、『集史』ほかフレグ=ウルスで編纂されたペルシア語史料にも頻見する。

このようなフレグ=ウルス當主の命令にかかる *yarlıg* < T. *yarlıγ* の語について、つとに杉山正明は、必ずしもモンゴル皇帝の「おおせ、命令」と對等のものではなく、むしろ君主の命令を文書化した「敕許状」と解すべき可能性を指摘した [杉山 1990, 1 = 杉山 2004, 393]。14世紀のイエメンのラスール朝で編纂されたいわゆる *Rasūlid Hexaglot* における對譯例 (A. *kitāba* “writing, record” = P. *miṣāl* “royal

mandate” = T. yarlıg (< yarlıy)) がこの杉山案の傍證となり得ることは、すでに拙稿で指摘した〔松井 2008a, 15; 松井 2008b, 27; cf. Golden 2000, 202〕。また宮紀子も、フレグ=ウルスの後継國家であるジャライル朝の君主シャイフ=ウヴァイス (Šayh Uways, r. 1356–1374) が1358年に發行したモンゴル語・ペルシア語合璧文書にみえる M. jarliq の語に對して、文脈上の理解に基づきつつ「<sup>かきもの</sup>文字」の和譯をあてる〔宮 2014, 25–26〕。宮は注意しなかったが、この文書のモンゴル文第12–13行には「この jarliq の裏面 (のペルシア文) に書いた定めにより (ene jarliq-un kerü-dür bičigsen yosuvar)」という表現がみえるので〔Herrmann / Doerfer 1975, 74〕、14世紀後半のイラン方面では、モンゴル語 jarliq が明らかに文書化された「敕許状、命令書、證書」として用いられたことを再確認できる。ちなみに、14世紀末～15世紀以降のジョチ=ウルスとその後裔政權の發行したテュルク語行政命令文書においても、文書化された「敕許状、命令書、證書」としてのヤルリグ (T. yarlıy) の用例は、例えば、「<sup>朱印</sup>の<sup>ある</sup>ヤルリグ (al nišanlıy yarlıy; al tamyalıy yarlıy)」、「このヤルリグを<sup>把持</sup>している (bu yarlıynı tutup turyan)」、「ヤルリグを<sup>見て</sup> (yarlıy körüp)」といった表現から確認される〔e.g., Özyetgin 1996, 105, 106, 107, 114, 115, 116, 132; Özyetgin 2000, 172, 173〕。

しかしながら、上掲⑤～⑭の権限附與文言にみえる M. jarliq ~ T. yarlıy にまで、このような「(文書化された) 敕書、命令書」の語義を敷衍させることは難しい。例えば、⑥の發令者ケドメン=バートルは、トゥルファン地域の主邑高昌に駐在していたチャガタイ=ウルスの代官と思われ、⑥文書の内容はシングギング (Singging < Chin. 新興) つまり現在のセンギム (Sänggim) 村に土地を有していた人物の税役免除に關するものであった〔松井 1998b, 33–34; 松井 2008a, 15–16; Matsui 2014a, 271–272〕。このような地理的局所の案件について、文書の發行者が、逐一チャガタイ=ウルス當主からの「文書化された敕許状 (jarliq) により」決裁を仰いでいたとは考えづらい。その點では、⑨～⑭のフレグ=ウルス文書、さらには①～④の大元ウルス發令文書の諸例も同様であり、必ずしも皇帝やウルス當主からの文書化された命令に依據することを示すものではなく、あくまで文書發行者が自身の依據する權威を明記するための定型的な表現にすぎない、と考えるべきであろう。

以上の諸點をまとめれば、モンゴル皇帝の命令に限定して M. jarliq ~ T. yarlıy の語を用いるという體例・規範は、13世紀末以降にチャガタイ=ウルス・フレグ=ウルスの臣僚が發行者となって「國內向け」に作成した——上掲⑤～⑭のような——行政文書では、もはや嚴格には遵守されていなかったとみなしてよいであろう。

## 2. 例外的冒頭書式をもつウイグル文供出命令文書

さて筆者は、トゥルファン盆地を中心とする東部天山地方出土の古ウイグル語世俗文書のなかでも、物件 (金銭、人的勞働力を含む) の供出を命令する行政文書すなわち供出命令文書の歴史學的研究を進めてきた。

目下、筆者が確認し得た限りでは、これらのウイグル文供出命令文書の總数は99件にのぼる。これらは、書體、捺された公印の形態的特徴、いくつかの特徴的な書寫上の體例、さらには閏月記



載などにより、10～12世紀の西ウイグル時代、13～14世紀初頭のモンゴル帝國・大元ウルス支配時代、さらに14世紀以降のチャガタイ＝ウルス支配時代へと、その屬する年代をおおよそ判定することが可能である。ただし、その書式は全體としてほぼ共通しており、冒頭に(1)十二支獸紀年・月日が記され、續いて(2)物件供出の理由・目的、(3)供出物件とその數量、(4)供出負擔者、が場合によっては順序を變えつつ記され、末尾の(5)命令文言が記された上で、公印（官印）が押捺される〔松井 1998a, 032; 松井 1998b, 11–13; 松井 2002, 94–100; 松井 2003, 55–57; Matsui 2009; 松井 2010, 33–35; Matsui 2014b〕。

ところで、冒頭の(1)十二支獸紀年・月日に先立って、例外的な記載を有するウイグル文供出命令文書が、管見の限り4件存在する。以下、これら4件の文書について、文獻學的な校訂テキスト・和譯と、最小限の語註を提示する。なお、筆者が現在準備しているウイグル文供出命令文書の包括的な校訂テキスト資料集成では、この文書4件に對して、それぞれB3・B4・D20・E2という編號を與えているので〔cf. Matsui 2014b, 629–630〕、本稿でもその編號に従って引用する。いずれも草書體ウイグル字で書かれており、また解説・語註の各處に示すような諸點からも、13～14世紀のモンゴル帝國時代に屬することは疑いない〔cf. Matsui 2014b, 617–618, 620–622〕。

#### B1 + B2 + B3 + B4      SI 6544

いずれも「羊年」の紀年をもつ4件のウイグル文供出命令文書を連貼したものであり、1898年のロシアのV. I. Roborovskij, D. A. Klemencの高昌故城調査によって將來され、現在はロシア科學アカデミー・サンクトペテルブルク東方文獻研究所に所藏されている。なお、かつての所藏番號はSI. Fig. 14とされていた〔cf. Tuguševa 2013, 135〕。

つとに筆者は、連貼された4件のうちの第一文書（USp 53.1=後掲B1）をとりあげつつ、これらの4件がいずれも驛傳馬の一時供出によるクブチル税（qurčir ~ P. qurčūr < M. qubčiri）の代納命令であることを論證した〔松井 1998a, 035–037〕。4件全點を扱った校訂テキストはまずUSp 53.1–4として發表され、その後も多くの研究者により利用されている<sup>4</sup>。最近では、李經緯・TuguševaもUSpを微修正した校訂テキストを發表している〔李經緯 1996, 198–203; Tuguševa 2013, 135–138〕。しかしながら、その内容理解は、残念ながらなお不十分である。ただし、Tuguševa 2013は本文書の寫眞複製を初めて公刊した點で有益である。

筆者の實見調査により古文書學的情報を整理すると、4件はいずれも縦方向の漉き稿（5cm）のある中質紙を用いており、紙寸はそれぞれ14.5×22.0cm（B1）、15.0×19.0cm（B2）、14.5×18.0cm（B3）、14.5×19.0cm（B4）、これらを連貼された状態で約15.0×75.0cmである。また、4件のいずれにも同一の漢字の朱方印（9.0×9.0cm）が捺されており、その印文は「高昌王／總管府／□□印」

<sup>4</sup> E.g., Pelliot 1944, 156–157; Arat 1964, 36; Tixonov 1966, 102; ClarkIntro, 388–389, 441–443 (Nos. 105–108); Zieme 1980, 202; 田衛疆 1994, 33.

と判讀できる<sup>5</sup>。

後述するように、この4件の紀年である「羊年」はおそらく同一であり、憲宗モンケ (Möngke) 九年 (1259) 己未に比定される [語註 B3r1 参照]。憲宗モンケは、その即位元年 (1251) に、天山山脈北麓のウイグル王國の夏都ビシュバリク (Biš-Balïq > Chin. 別失八里～別十八里) に、ウイグル王國領を含む中央アジア・トルキスタン地域に對するモンゴル統治機關として別失八里等處行尚書省を設置していた [安部 1955, 49–57; 本田 1967, 89–91]。本文書の朱印鑑にみえる「高昌王總管府」とは、この別失八里等處行尚書省の屬下にあつて、高昌王すなわちウイグル王の支配領域を擔當した行政機關とみなせるであろう<sup>6</sup>。

本稿で歴史學的な検討の對象とする B3・B4 文書は、この連貼された4件のうちの後半の2件であるが、ここでは4件まとめて筆者の實見調査に基づく校訂を提示しておく。

B1	1	qo(yn) yil (yi)tinč (a)y	羊年第七月
	2	yäğirmikā öngtün čarig-	二十日に。先鋒軍 (東方軍?)
	3	-tin at alyalı klgüči	から馬を取りに来る
	4	ađay toyrıl-qa qoşang-	アタイ=トグルルとコシャング
	5	-qa balïq-ta müngü	への、城市で騎乗すべき
	6	iki at-ta bačaya trqan	2頭の馬のうち、パチャガ=タルカン
	7	yüz-intä bolmiš taz	の百戸 (内) のボルミシュ=タズが
	8	(b)ir at ulay birip iki	1頭の馬を供出して、2
	9	kün birip üç baqır	日間供出して、3錢の
	10	kümüş qupčir-qa	銀のクプチル税に
	11	tutzun •	換算せよ。

<sup>5</sup> 印文の解讀にあたっては赤木崇敏 (大阪大學) 氏のご教示を得た。ここに特記して謝意を示したい。

<sup>6</sup> 歴代のウイグル王=イドウクト (ïduq qut > Chin. 亦都護, 「聖なる天寵」の意) の事蹟を顯彰する『亦都護高昌王世勲碑』には「仁宗皇帝, 始稽故實, 封爲高昌王, 別以金印賜之。設王傳之官。王印行諸内郡, 亦都護之印則行諸畏吾而之境」という著名な一節があり [虞集『道園學古錄』卷24; 『元史』卷122・巴而朮阿而忒的斤 (Barčuq-Art-Tegin) 傳もおおむね同文], 仁宗アユルバルワダ時代になってはじめて當時のウイグル王ニグリン=テギン (Nigürin-Tegin > Chin. 紐林的斤) に「高昌王」號が與えられ、これに伴い「(高昌) 王印」と「亦都護之印」が併用されるようになったとされる。『世勲碑』ウイグル譯文もこれを踏襲して「ブヤントゥ=カーン (Buyanđu qayan, 仁宗) には恩賜されて, “金印 (altun tamya) と高昌王 (Kao-čang ong) の名を與えさせ, まさに以前のバルチュク=アルト=イドウクト (Barčuq-Art ïduq-qut) の如くに, 永遠にまでその一族たちに繼承させ, 新たに與えさせた高昌王の金印を外郡 (yat taš il-lär) にて通行させる令旨 (lingči) に用い, また別の以前の金印を周圍のウイグル人たちの間 (yaqın-ta Uyyur ara) で用いよ”とおおせになった (yarlıy boldı)」という [卡哈爾・劉迎勝 1984, 67]。『元史』卷108・諸王表も高昌王の始封を仁宗延祐三年 (1316) とする。ただし, 『元史』卷24・仁宗本紀・至大四年 (1311) 五月甲辰条は「高昌王傳」の設置を傳えているから, 少なくともこの時點で「高昌王」號が與えられていたことになる。そして, 本文書の朱印を「高昌王總管府」と讀んで誤りないとするれば, すでに憲宗モンケ時代以前から, ウイグル王イドウクトは漢語では「高昌王」と自稱・雅稱することがあったと推測できる。前掲の『世勲碑』漢文に「故實を稽へて」というのは, このような事情を反映しているのかもしれない。



B2	1 qoyn yil säkizinč ay yiti yngīqa 2 toqsın-taqı yiti yılqı ba(..)[ ] 3 kăpăz alyalı baryučı yăgănčük- 4 -kă turmıš-qa nampı- 5 -qa baryu iki at-ta 6 bačay-a tarqan yüz-intä 7 bolmiš taz bir at ulay 8 birip üç baqır kümüş 9 qupčır-qa tutzun	羊年第八月初七日に。 トクシンにある7年分のba(..)[...] 棉花を取りに行くイエゲンチュク とトゥルミシュへの、ナムピ（南平） へ行く2頭の馬のうち、 バチャガ=タルカンの百戸（内）の ボルミシュ=タズが1頭の驛傳馬を 供出して、3錢の銀の クプチル税に換算せよ。
B3	1 ariq bökä-ning 2 qoyn yil onunč ay bir 3 ygrmikä bor sıqturyli 4 kălgüči qulan ilči qra 5 ilči soydu ilči 6 olar-qa balıq-ta müngü 7 altı at ulay-ta bačay-a 8 trqan yüz-intä • bolmiš 9 taz bir at iki kün 10 birip üç baqır kümüş 11 qupčır-qa tutzun	アリク=ブケの。 羊年第十月十 一日に。ブドウ酒を壓搾させに 来るクラン使臣、カラ ソグドゥ使臣 たちへの、城市で騎乗すべき 6頭の驛傳馬のうち、バチャガ= タルカンの百戸（内）のボルミシュ= タズが1頭の馬を2日間 供出して、3錢の銀の クプチル税に換算せよ。
B4	1 qorumči oyul-nung 2 qoyn yil birygrminč ay 3 bir otuz-qa bor-či 4 sulyar-qa bor taryli 5 balıq-ta müngü bir 6 at ulay bačay-a trqan 7 yüz-intä bolmiš taz 8 birip bir yarım 9 baqır kümüş qupčır- 10 -inga tutzun	コルムチ王子の。 羊年第十一月 二十一日に。ブドウ酒係の スルガルへの、ブドウ酒を集めるために 城市で騎乗すべき1頭の 驛傳馬を、バチャガ=タルカン の百戸（内）のボルミシュ=タズが 供出して、1.5 錢の銀のクプチル税 に換算せよ。

## 語註

**B1r2, öngtün čärig:** öngtünは「前方;東方」であるから、öngtün čärigで「先鋒軍;東方軍」の意[USp, 90; Tuguševa 2013, 136]。後掲語註 B3r1 で述べるように、本文書の「羊年」は憲宗モンケ九年(1259)己未に比定される。當時、皇帝モンケは自ら南宋遠征に出馬して四川地方の最前線に至っており、本文書が発行された陰曆七月二十日(西曆8月10日)から八日後の七月二十八日癸亥(西曆では8月18日)に崩御する。本文書で、馬匹を調達するために使臣を派遣してきた öngtün čärig「先鋒軍;東方軍」とは、この南宋遠征軍をさしていたのかもしれない。

**B1r6-7, bačay trqan yüz-intä bolmiš taz:** 連貼された4件のすべてにみえるこの記載はながらく誤解されていたが[USp, 92; ClarkIntro, 388-389; 李經緯 1996, 200], すでに拙稿[松井 1998a, 035; 松井 2002, 97, 103-104]で明らかにしたように、yüz ~ yüzを「百, 100」の原義から行政組織として

の「百戸」とみなし、その前は百戸長の人名、後續する人名は供出負担者と理解すべきである<sup>7</sup>。ただし、yüzの前後の人名の轉寫は、本稿の通り微修正する。人名Bačayaに後續するtrqan ~ t(a)rqan ~ tarqanは突厥時代以来のテュルク語官稱號。供出負担者となる人名Bolmišに續くtaz「秃」は、やはり人名要素として頻出する。

**B2r2, toqsın:** 麴氏高昌國・唐代の篤新に由來するオアシス都市で、『元史』地理志の他古新、現在のトクスン (Toqsun > Chin. 托克遜) に相當する [Matsui 2014a, 169, fn. 6]。

**B2r2-3, yiti yīlqī bay[ɿʔ] kápāz:** 冒頭のyiti「7, 七」と末尾のkápāz「棉花; 棉」は明瞭である。續く語をiliとするRadloffには従えず、字面からはyīlqīと讀める。諸先學はさらに後續の語をP'R=bar「ある, 在る」としているが、實際の字形はさらに長く、下端までの短い缺落部にも續いていたらとみられるので、別語とみなさねばならない。

T. yīlqīには「～年分の」と「家畜; 畜生」の兩義があり [ED, 925–926], Tuguševaは後者を採用して本處を「7頭の馬 (yīlqī) の束 (bay) の棉 (xlopok [količestvom] v sem' lošadinix v'jukov)」と解釋する。しかし、棉・棉花は一般的には重量單位のtangやbatmanで計量されるので、本處であえてyīlqī「家畜」により計量したとは想定しづらい。むしろ、本來は税として徴収されるべき棉花のうち、滞納されたものが7年分 (yiti yīlqī) 残っており、本文書はその徴収に關係していたのかもしれない。

**B2r4, nampī:** 麴氏高昌國時代～唐代に、トウルファンの南方に位置していたオアシス都市の名の南平 (GSR, 650a + 825a, \*nām-bjwng) を「ウイグル字音」形式で音寫した地名。ウイグル文契約文書SUK Ad01にみえる城市名アムビ (Ambī) も、語頭をN-字とみてNampīと改め、同地とみなすべきである。モンゴル時代のウイグル語文書には、このNampīの語頭のN-がL-に交替したラムピ (Lampī) という異形も在證されており、これが現在のラムプ (Lampu > Chin. 拉木伯～讓布) という集落名の直接の起源である [Matsui 2014a, 278–282]。本文書で便宜を供與されるイエゲンチュクとトウルミシュの2名は、高昌から最終目的地のトクシンに向かう際、その中間にあるナムピ／ラムピで馬を交換したのであろう。

**B3r1, ariq bōkā:** このAriq-Bōkāという人物が初代モンゴル皇帝チンギス＝カン (Činggis-qan) の末子トルイ (Tolui) の末子アリク＝ブケ (Ariq-Bōke, d. 1266) に同定されることは、B3文書がこの第1行のみを擡頭して敬意を表現していることから也确实である<sup>8</sup>。

本文書でアリク＝ブケが言及されるのは、當然、モンゴル帝國における彼の政治的地位を反映するものである。アリク＝ブケが帝國の政治中樞にあったのは、長兄のモンケが第4代皇帝 (憲宗) として即位した西暦1251年から、次兄のクビライ (Qubilai, r. 1260–1294) との帝位繼承戰爭に敗れる

<sup>7</sup> Tuguševaが拙稿の指摘に気付かず、なおbačaya tay yüz-intä bolmiš tay「バチャガ山に面している畜群 (tabuna naxodjaščegosja na gore Bačag)」と誤讀しているのは遺憾である [Tugusheva 2013, 135–137]。

<sup>8</sup> Radloff以来のqačan-kōkā, また最近のTuguševaのqačīy-kōkāという轉寫 [Tugusheva 2013, 136] は、いずれも誤り。

中統五年（1264）陰暦七月まで、とみなすことができる。この間の「羊年」は憲宗モンケ九年（1259）己未だけであり、ここに本B3文書の年代は決定する。連貼されているB1・B2・B4文書の「羊年」も明らかに同年である [Matsui 2014b, 617–618]。

この年の陰暦七月二十八日癸亥に憲宗モンケは崩御する。アリク=ブケは、太祖チンギスの末子トルイのそのまた末子としてチンギス宗家の財産を相續する立場にあり、またモンケの南征に際してはモンゴル本土の留守を預かり、かつモンゴル本土でのモンケの葬儀をも主催して、第5代皇帝の正統な候補者として最も有力であった。その正統性を軍事力で覆したのが、翌年中統元年（1260）三月一日に即位した第5代モンゴル皇帝の世祖クビライであった。

本B3文書の内容は、モンケ崩御の直後の憲宗九年（1259）陰暦十月十一日に、アリク=ブケの權威を奉じる使臣が、トゥルファン地域でブドウ酒の製造（あるいは輸送）を擔當していたことを示唆する [本稿第3節参照]。周知のように、モンゴル時代、ウイグル王國領で生産されるブドウ酒は、最高級品として珍重された [松井 1998b, 29]。本文書で言及されるブドウ酒は、モンケの葬儀への参列者、あるいはアリク=ブケ即位のためのクリルタイへの参加者に提供されることが想定されていたのかもしれない。

**B3r3, siqturyli:** 11世紀の『テュルク語總覽 (*Dīwān Luġāt al-Turk*)』にも *ol üzüm siqturdī* 「彼はブドウを壓搾させた」という表現がみえることからみて、本處も *siqtury(a)li* < *v. siqtur-* (caus.) < *siq-* 「(ブドウ酒を) 壓搾させる；壓搾作業（製造）を手配する」とする Clauson の解釋に従う [ED, 807; cf. CTD II, 55; Tugusheva 2013, 195]。

**B4r1, qorumči oyul:** *T. oyul* 「息子 (> *P. ügöl*)」およびその派生語である *T. oylan* 「少年 (> *P. üglān*)」は、*M. kö'ü(n) ~ ke'ü(n)* 「子、息子 (> *P. kā'ün*)」と同じく、「王子、諸王」の意で頻繁に用いられた [羽田 1925 = 羽田 1958, 176, 179; TMEN II, Nrn. 502, 198; Boyle 1971, 286]。本處の *Qorumči* も、*oyul* 號を伴っており、またB3文書のアリク=ブケと同様に擡頭による敬意表現を加えられていることから、モンゴル王族だったことは確實である。

歴史状況からみて、この「コルムチ王子」は、第2代モンゴル皇帝オゴダイの第6子カダアン (*Qada'an ~ Qadaγan* > Chin. 合旦) の第5子コルムシ (*Qorumši ~ Qurumši*) に同定できると考えられる<sup>9</sup>。第4

<sup>9</sup> モンゴル人名 *Qorumči* の語末音の *-či* はしばしば *-ši* に交替したと考えられる。例えばムカリ (*Muqali*) の曾孫で第5代ジャライル國王家當主となった「忽林池／忽林赤」のモンゴル語名は、漢字表記からは本處と同じく *Qorumči* と再構できるが、バルシア語史料では *Qūrumši* と記録されている。また、『元史』卷169に立傳される賈シラ (*Šira* > Chin. 昔剌) の孫コルムチ (虎林赤 < *Qorumči*) は、同卷9・世祖本紀・至元十四年 (1277) 六月丁丑条では「忽林失 (< \**Qorumši*)」と表記されている。この人名 *Qorumči ~ \*Qorumši* > Chin. 忽林池／忽林赤／虎林赤／忽林失 ~ *P. Qūrumši* については、「ホラズム出身(者)」を意味する *P. Hwārizmī* からの借用・轉訛とする Pelliot の提唱が、最近まで受入れられている [Pelliot 1938, 149–152; cf. Cleaves 1949, 433–435; Rybatzki 2006, 525–526]。しかしその論據は、結局のところ、『元朝秘史』 (§263, 11:50:05; 11:50:08) でホラズム出身のムスリム財務官僚マスウード=ベグ (*Mas'ūd Beg* > 馬思<sup>中</sup>忽<sup>魯</sup>) の「姓」が<sup>中</sup>忽<sup>魯</sup>石 > \**Qurumši* と漢字表記される點に盡きる。また Pelliot の想定する *P. Hwārizmī* > *M. \*Qorusmi* という借用形式も在證されておらず、そこから \**Qorumši ~ Qorumči* という子音轉換を推定するのも飛躍がある。『元朝秘史』の<sup>中</sup>忽<sup>魯</sup>石については、『秘

代皇帝モンケは、自身の即位に反対してクーデタを計画したオゴデイ系・チャガタイ系王族に徹底的な弾圧を加えたが、その際、オゴデイ系に属しながらクーデタには参加しなかったカダアンは、皇帝モンケの軍隊から1万人隊を分與され、オゴデイの諸オールド・后妃の一部をも相續して、ビシュバリク地域に遊牧地を獲得した〔Boyle 1958, 595; 村岡 1992, 43; 松田 1996, 48; cf. 安部 1955, 56–57; 『元史』 卷3・憲宗本紀, 憲宗二年（1252）夏条〕。そのカダアンの王子コルムシについての情報は東西の編纂史料にほとんど記録されていないが、本文書のコルムチ／コルムシがカダアンの子であり、父の牧地であるビシュバリクから天山を南に越えた高昌・トゥルファン地域に影響力を行使したという蓋然性は高い。その点でも、本文書における同定は重要である。

**B4r4, taryli:** Radloff以来、T'RYXLY = tary(a)li と判讀され、v. tari- 「(作物を) 作付けする；(土地を) 耕す, 耕作する」に關連づけられている<sup>10</sup>。しかし、先行する bor はあくまでも製品としての「ブドウ酒」であって、「ブドウの木」や「ブドウ園」ではないから、「耕す；栽培する」という解釋はそぐわない。また、原文書を実見したところ、實際の字面も T'RXLY = tary(a)li であって、これを T'RYXLY = tary(a)li と解するのは苦しい。

古テュルク語の v. tar- には「解散する, 分配する」の意があり [e.g., ED, 529], 本處の文脈とも必ずしも乖離しないが、Text B3 の使臣がブドウ酒製造に關係して言及されるのと比較すれば、本 B4 文書の使臣も「ブドウ酒を分配するため」にトゥルファン地域へ派遣されたとは考えづらい。ここではあえて Radloff が新ウイグル語として収録する v. tar- 「一箇所に集める (auf einer Stelle sammendrängen, sammeln)」〔VWTD III, 836〕によって解釋しておく。

## D20 U 5790 + \*U 9261 (T III 66)

本文書は、第3次ドイツ＝トゥルファン探検隊により將來され、現在はベルリン科學アカデミー（以下、BBAW）に所藏される。現存する U 5790 文書は上半部分のみの斷片である〔VOHD 13,22 #270; 本稿 Fig. II, 1〕。しかし、R. R. Arat がベルリン留學（1928～1933年）時に撮影した寫眞〔本稿 Fig. II, 2〕により、本來の状態を確認できる<sup>11</sup>。\*U 9261 という文書番號は、この破損した部分に BBAW が與えたものである。

---

史』モンゴル語原本自體の誤記の可能性なども考慮すべきではなからうか。人名 Qorumči ~ \*Qorumši の語源としては、モンゴル語 qorumji 「減少, 損」〔Lessing, 967〕か、または qurim 「婚禮；宴會」〔MKT, 686; Golden 2000, 291〕に職掌を示す +či が接續した「宴會係 (qurimči)」, テュルク語ならば qorum 「砂礫, 大岩」〔ED, 660; CTD I, 303〕に由來する「石匠 (qorumči)」なども想定できよう。

<sup>10</sup> Radloff は taryli と轉寫し、bor taryli で「ブドウ（の木）の手入れをする者 (der die Wein(stöcke) besorgt)」と譯した〔USp, 91–92〕。Clouston が本處を “a wine grower” と譯すのも、明らかに Radloff に従っている〔ED, 532〕。Malov は接尾辭の -yli を正しく副動詞 -y(a)li 「……するために」と修正したが、bor tari- を「ブドウ園を耕作する (vozdeľyvat' vinogradnik)」と解釋する點は、基本的に Radloff と變わらない〔USp, 231〕。Clark もこれを踏襲して “cultivate wine” と譯す〔ClarkIntro, 443〕。

<sup>11</sup> この Arat 撮影寫眞資料の調査と發表を許可された Osman Fikri Sertkaya 教授のご好意に、この場を借りて深甚の謝意を表す。

現存の U 5790 文書の紙寸は 9.0×8.6cm なので、これをもとに推計した本来の文書の縦寸は 16.5cm 前後になる。

1	milik tāmūr oγul-nung	メリク＝テムル王子の。
2	it yil onunč ay altı yangïqa	犬年第十月初（旬の）六日に。
3	uz-a b(o)r iltür siliba ilči	匠人にブドウ酒を運ぶシリバ使臣
4	-ning nōkōr yn-a yisüdār il(č)[i]	の侍従、およびイスデル使臣（へ）
5	yol aşuq-luq birgü üç tayaq āđ	旅行用食糧として與える 3 串の肉と
6	altı kūrī min-tā turpan-ta qanimdu	6 斗の麵粉のうち、トゥルファンのカニムドウが
7	bir tayaq āđ iki kūrī min	1 串の肉、2 斗の麵粉を
8	būđürüp b(i)[r](šū)[n]	調達して供出せよ。

## 語註

**D20r1, milik tāmūr:** 前半の人名要素 milik (～melik～mālik～M. melig<P. malik) について Raschmann は Tilik の可能性を指摘するが [VOHD 13,22 #270], その必要はない。アリク＝ブケの末子メリク＝テムル (Melig-Temūr ~ P. Malik-Tīmūr ~ Chin. 明里帖木兒～滅里鐵木兒, d. 1307) に同定すべきことは、「息子」から轉じて「王子」を意味する oγul [上掲語註 B4r1 参照] が後續していることから明らかである。

世祖クビライは、アリク＝ブケの没 (1266) 後、アルタイ方面にあったその牧地・牧民を末子のメリク＝テムルに相續させた。至元八年 (1271)、メリク＝テムルは、カイドゥ勢力に對抗するため、大元ウルス軍團とともに天山山中のアルマリクへ派遣された。至元十三年 (1276)、シレギ (Širegi > 失烈吉) の亂の勃發でこのアルマリク駐屯軍團は崩壊し、その結果メリク＝テムルはカイドゥ勢力に合流して大元ウルス政權と敵對することとなった。その後、至元二十九年 (1292) には一時的に大元ウルスに來降したこともあったが、彼が最終的に大元ウルスに來降したのは、クビライ曾孫のハイシャン (Haišan, のちの武宗, r. 1307–1311) がオゴデイ諸裔の平定のためにアルタイ以西に進撃した大德十年 (1306) のことである。メリク＝テムルは安西王アーナンダ (Ānanda > 阿難答) に伴われて、大德十一年 (1307) 正月庚午には大都宮廷に至る。その 3 日後 (正月癸酉) に皇帝テムル (Temūr, 成宗, r. 1294–1307) が崩御し、メリク＝テムルはアーナンダの即位を援助するが、ハイシャンの弟アユルバルワダ (Ayurbarwada, 仁宗, r. 1311–1320) の宮廷クーデタにより失敗し、五月にアーナンダとともに上都で處刑された [松田 1983; 村岡 1985; 松田 1988; 杉山 1995]。

従って、本文書第 2 行の紀年「犬年」は、1266～1307 年の 40 年間に求めることができるので、至元十一年 (1274) 甲戌、至元二十三年 (1286) 丙戌、大德二年 (1298) 戊戌のいずれかとなる。この点については、本稿第 3 節であらためて検討する。

**D20r2–4:** この第 2–4 行の行頭下げ (「降格」) は、第 1 行冒頭のメリク＝テムルに對する敬意表現である。このような「降格」による敬意表現形式は、チャガタイ＝ウルス支配時代のモンゴル語・



ウイグル語文書に特徴的なものであることは松川節によって指摘され [松川 1995, 112–115], それを承けて筆者はこれを「チャガタイ＝ウルス式敬意表現」と呼んだ [松井 1998b, 8]。しかし、本 D20 文書は、メリク＝テムル存命の 1306 年以前に年代比定され、チャガタイ＝ウルスが東部天山地域の支配を本格化する 1320 年代後半より最短でも 20 年前後は遡ることとなる。従って、このような「降格」による敬意表現形式をチャガタイ＝ウルス支配の指標とすることはできず、その由來やまた「チャガタイ＝ウルス式敬意表現」という呼稱も再考しなければならない。

**D20r3a, uz-a b(o)r iltür:** uz-a は uz「匠人, 工匠」に與格語尾 -a が後続したもの。「ブドウ酒 (bor)」に後続する iltür は、v. ilt- ~ ilät-「運ぶ, もたらす」[ED, 177] の中立形とみなす。

**D20r3b, siliba:** Syr. Šelībā ~ Šelīvā に由來するキリスト教人名 Siliba ~ Seliba は、ベルリン舊藏のウイグル契 \*U 9000 や、セミレチェ發現の東方キリスト教徒テュルク語墓誌銘にも在證される [Raschmann 2008, 129; Chwolson 1890, 134–135]。

**D20r4a, nōkōr:** ~ nōkōr < M. nōkōr「侍従, 従者, 下僕; 屬僚; 仲間」[Lessing, 593; TMEN I, Nr. 388]。モンゴル帝國時代におけるチンギス帝室の「御家人, 郎黨」としての nōkōr (> P. nūkār) の歴史的役割については、護雅夫の先驅的研究 [護 1952a; 護 1952b] とそれを大きく發展させた志茂碩敏の一連の研究成果に詳しい [志茂 1995; 志茂 2013]。しかし本文書では本來の普通名詞として理解すべきであろう。BBAW 所藏の供出命令文書 U 5284 にも同様の用例が確認できる [松井 2002, 108]。なお、『元朝秘史』・『至元譯語』・『高昌館譯語』雜字では、いずれも「伴當」と漢譯される [石田 1934 = 石田 1973, 175; Ligeti / Kara 1990, 265, Kara 1990, 314; Ligeti 1966, 185–186, 299]。

**D20r4b, yīsūdār:** ~ P. yīsūdar ~ Chin. 也速迭兒／也速答兒／也速帶兒, etc. < M. yesüder「第9の」。頻出するモンゴル人名 [Rybatzki 2006, 740]。

**D20r5a, yol aşıuq-luq:** 同じ表現が、後述の「ヤリン文書」群に屬する Ch/U 7213v (松井 2003, Text E = Matsui 2014b, E3) にもみえる。

**D20r5b, tayaq:** 第 5, 7 行の文脈からは、肉 (āq) の計量單位として用いられたとみなせる。テュルク語では「支持, 支えるもの」の他に「杖, 棍棒, 竿」などの意がある [ED, 568; TMEN II, Nr. 864]。本文書で供出された肉は、乾し肉・練り肉などを棍棒 (tayaq) 状にしたものか、あるいは細い棒 (tayaq) で串刺しの状態にしたものだったのかもしれない。

**D20r6, qanimdu:** 漢語「觀音奴」に由來する人名。

## E2 \*U 9234

ドイツ＝トゥルフアン探検隊により將來された資料であるが、第二次世界大戦中に所在不明となり、現在はやはり R. R. Arat がベルリン留學中に撮影した寫眞により確認できる<sup>12</sup>。出土地番號は付されておらず、Arat 自身は 197/48 という編號によって、その内容を簡単に紹介している [Arat 1964,

<sup>12</sup> この寫真資料の調査と發表についても、Osman Fikri Sertkaya 教授のご好意で研究・發表を許された。重ねて深謝する。



21, 36]。\*U 9234という文書番號は、現在BBAWにより與えられたものである。紙寸などの情報は不明である。

本文書は、筆者がかつて校訂した「ヤリン文書」群〔松井2003〕と共通の歴史的背景のもとで作成されたものである。供出負擔者としてケルシン（Kärsin）とヤリン（Yalın）という人物が共通しており、また本文書末尾に捺された墨印3顆のうち、下の2顆は「ヤリン文書」群に共通して捺されていた墨印のうち2つ（松井2003の墨印A・墨印C）と同一だからである。

「ヤリン文書」群は、總體としては至治二年（1322）壬戌前後に年代比定され、またチャガタイ＝ウルスがトゥルフアン地域を実効支配する西暦1320年代後半には及ばない〔松井2003, 53–55〕。従って、本文書の「羊年」も延祐六年（1319）己未に比定される可能性が最も高い（ただし、干支をひとまわり遡る大徳十一年（1307）丁未の可能性もある）。

- 1 [ oyul?-n]ung
- 2 qoyñ yil čxšpt ay toquz yangīqa y(u)rđ(?) qurɣu tñiyāl ilči
- 3 alylī kālmiš üč küri čubayan üč k(ü)[ri] üzüm üč küri
- 4 alīma talqan-i on iki qalča tušab [ ]-ta munča\~ta/ lükčüng-
- 5 -kā tägir bir küri čubayan bir küri [ ] quruy üzüm
- 6 [bir k]üri alı(m)[a tal]qan-ı tört qalča tušab-ta kärsin yalın olar
- 7 [ küri] čubayan bilä bütürüp [bi]rzün

- 1 [……王子?] の。
- 2 羊年戒月（＝第十二月）初九日に。宿營地(?)を整えるべきダニエル使臣が
- 3 受領しに來た3斗の棗、3斗のブドウ、3斗の
- 4 碎いた乾しリンゴ、12角杯のシロップ……のうち、これらのうち、リュクチュング
- 5 に（税として）至る（＝賦課される？）1斗の棗、1斗の乾しブドウ、
- 6 [1] 斗の碎いた乾しリンゴ、4角杯のシロップのうち、ケルシン・ヤリンたちが
- 7 [……………□斗の] 棗を、すべて調達して供出せよ。

## 語註

**E2r1, [... oyul?-n]ung:** 現存部分の字畫は-WNKと判讀できる。これを屬格語尾 [-n]ungと解釋し、破損缺落部にoyul「王子、皇子」を推補するのは、前掲B4・D20文書第1行との比較に基づく。「王子、皇子（oyul）」の他の推補の可能性としては、稱號ならば「王（ong < Chin.）」、「公主（qunčuy < Chin.）」、「カトン、可敦、后妃（qatun）」などの可能性がある。またB3文書のArīq-Bökäのような個人名だけが書かれていたとすれば、テムル（Temür）、クトルグ（Qutluy）など、末音節に円唇母音をもつ名詞を想定できる。

いずれにせよ、この第1行に書かれていたはずの人物は、第2–4行の行頭の「降格」による敬意表現の對象とされているから〔前掲語註 D20r2–4 參照〕、やはりB3・B4・D20と同様、モンゴル王

族、もしくはそれに準じる上級支配層に属していたはずである。

**E2r2a, y(u)rđ(?) quryu:** 最初の語の字畫は虚心にみれば YYRD = yird であるが、適当な語彙を見出せない。かりに「牧地；宿營地；テント」をさす yurt ~ y(u)rđ = YWRD の -W- の筆致が十分でないものとみなし [TMEN IV, Nr. 1914], 續く quryu < v. qur- “to put something in order; to set in order, to set up; to organize (a meeting)” [ED, 643] とあわせて「宿營地を整えるべき」と試譯した。その背景としては、本文書の供出物件である棗 (čubayan)・乾しブドウ (quruγ üzüm)・乾しリンゴ (alīma talqan-i)・シロップ (tušab) などが「宿營地 (yurt)」でモンゴル支配層が開く宴會・酒宴で用いられたものであり、「宿營地を整える」作業にはこれらの食糧・飲料の準備・調達までが含まれていた、という状況を推測できるかもしれない。

**E2r2b, ṭniyāl:** ~ ṭ(a)niyāl ~ ṭaniyāl ~ daniyāl 「ダニエル」。Syr. d’nyl = dānī’el ~ dny’yl = dānīyel から借用されたキリスト教人名である。

**E2r4a, alīma talqan-i:** alīma は alma 「リンゴ」の異形とみる。後續の talqan は “crushed parched grain” の意 [ED, 496] であるから、alīma talqan-i で「碎いた乾しリンゴ」とみなすことができるだろう。文脈から、第6行にも推補できる。

**E2r4b, qalča:** M. qalja “inkstand made of horn” [Lessing, 922] の借用語とみて、本處では「角杯」と譯す。本處では、明らかに飲料としてのシロップ (tušab) の計量単位として用いられている。

その實態量については、BBAW 所蔵の帳簿様文書 Mainz 765 によっておよその推計が可能である。この文書には「モンゴル=バフシに5角杯のブドウ酒, 1斤の肉, 1斤の〔麵粉を與えた。〕……ウラダイ使臣に番役で5角杯のブドウ酒, 1斤の麵粉, 1〔斤の〕肉を與えた。アフマド使臣に, 5角杯のブドウ酒, 1斤の麵粉, 1斤の肉を與えた (ṡmongol baxšī-qa biš qalča bor bir baḡman āḡ bir baḡman m[in b] ..... 17uladay ilči-kā kāšig-tā 18biš qalča bor bir baḡman min bir āḡ b axmaṭ ilči-kā 19biš qalča bor bir bamḡan min bir baḡman āḡ b)」という記載がみえる。ここでブドウ酒 (bor)・肉 (āḡ ~ āt) 麵粉 (min) を與えられている3名のうち、ウラダイ・アフマド (Axmaṭ < A.-P. Aḡmad) 兩名は「使臣 (ilči)」として言及されるから、明らかにモンゴル帝國の驛傳制度を利用する公權力者である。引用部冒頭の「モンゴル=バフシ」も同様であろう<sup>13</sup>。すなわち、この帳簿は、驛傳制度の利用に関する支出簿とみなされる [cf. VOHD 13,21, #203]。

モンゴル帝國の驛傳制度では、使臣1名が1日に支給される肉 (U. āt ~ M. miqa)・麵粉 (U. min ~ M.

<sup>13</sup> このモンゴル=バフシ Mongol-baxšī の解釋は問題をはらむ。周知のように、古ウイグル語の baxšī は Chin. 博士からの借用語であり、トゥルファン出土ウイグル語文獻ではおおむね「師, 師僧」の意で用いられるので、本處でもモンゴル (Mongol < Mongyol) を人名とみて「モンゴル (という名の) 師」と解するのが自然である。ただし、フレグ=ウルス文書行政制度を繼承するジャライル朝にみられるような、宮廷官房で「モンゴル語諸命令文の書記 (M. bičigčī ~ P. bitikčī < T. bitigčī)」として任命され、世襲の「師傅」として特殊な地位を占めたウイグル系・モンゴル系のバフシ (baxšī > P. baḡšī) [宮 2012, 45-51] のような存在を、トゥルファン地域を支配したウイグル王家や近隣のモンゴル王族の家政機構にも措定できるかもしれない。ティムール朝における「ウイグル=バフシ」の存在 [久保 2012] にも注意すべきであろう。

künesün)の量は各1斤(U.-M. batman)≒640グラム、また酒(トゥルフアン地域ではブドウ酒 bor や蒸留酒 araḡī ~ araki)の量は1升(U.-M. saba)≒840mlと規定されていた[松井 2004, 165–163]。Mainz 765 文書でモンゴル=バフシ・ウラダイ使臣・アフマド使臣に與えられた肉・麵粉の量は等しく1斤(batman)であり、これはモンゴル帝國の驛傳制度の規定額と一致する。従って、やはり彼らが等量で支給されている「5角杯のブドウ酒 (biš qalča bor)」も、驛傳制度の規定額である1升到相當するものと推定される。とすれば、液體計量單位としての qalča の容量は、1升(=840ml)÷5=168ml、つまり約170mlと概算できる。

ちなみに、この Mainz 765 支出簿では、バリクチ使臣 (<sub>10</sub>Baliqčī-ilči)・サルガル使臣 (<sub>17</sub>Salγar-ilči)・ブカ使臣 (<sub>17</sub>Buqa-ilči)・鐵工たち (<sub>11</sub>tāmir-či-lār)、さらには某ベグの侍從 (<sub>12</sub>noḡār < Mong. nōkār ~ nōkūr)に、それぞれ「2.5角杯のブドウ酒 (iki yarīm qalča bor)」を與えたことも記録される。これは、1日あたりの規定量である5角杯の半額に相當する。『永樂大典』(卷19418, 葉3a)所収の『經世大典』・站赤には、至元二十一年(1284)四月の驛傳利用者の支給規定として「正使宿頓、支米一升・麵一斤・羊肉一斤・酒一升・柴一束・油鹽雜支鈔三分；經過減半」とあり、「宿頓」すなわち驛站到宿泊する使臣に對して、「經過」すなわち驛站を通過するだけの使臣への支給額は半額と定められている。Mainz 765 文書で、5角杯の半額「2.5角杯のブドウ酒」を支給されている者も、このように驛站を「經過」して行った者なのであろう。

なお、本E2文書では、供出すべき物件の總額が「3斗の棗、3斗のブドウ、3斗の碎いた乾しリンゴ、12角杯のシロップ」とされ、そのうちリュクチュングへ納税される部分が「1斗の棗、1斗の乾しブドウ、[1]斗の碎いた乾しリンゴ、4角杯のシロップ」すなわち總額の1/3とされる。シロップの納入額「4角杯」は、上にみたブドウ酒の使臣1名の規定日額5角杯と近似し、これもやはり使臣への供應に關係する物件供出と推測することができる。

**E2r4c, ʃušab:** 前註にみた液體計量單位 qalča で計量されていることから、現代トルコ語の duşab 「ブドウその他の果物で作られるシロップ (üzüm veya başka meyveden yapılmış şurup)」[Tietze, 664b]と同じく、P. dūšāb “syrup of grapes or dates, anything upon which milk is poured” [Steingass, 544]の借用語とみなす<sup>14</sup>。本處の後續部分は破損缺落しているが、文脈からはそこにテキストがあったとは考えられない。他の「ヤリン文書」の例[松井 2003, 53]と比較すれば、本文書も漢文佛典の紙背を二次利用して作成したと推定され、その時點ですでに紙が破損していたのかもしれない。

**E2r4-5, lükčüng-kä tāgir:** 地名リュクチュング (Lükčüng) は、唐代の柳中に由來し、現在のルクチュン (Lukčun > 魯克沁) にあたる。モンゴル期の漢文史料では魯古塵あるいは呂中与音寫された例がある。

「ヤリン文書」に屬するウイグル文供出命令文書には、Ch/U 6757v + Ch/U6756v (= Matsui 2014b, E11)には、本文書と同様に、この「リュクチュングに至る (lükčüng-kä tāgir)」という表現で供出

<sup>14</sup> ちなみに *Rasūlid Hexaglot* には A. al-dibs “syrup, molasses, treacle esp. of grapes” = P. dūšāb = T. bekmez “syrups of fruit juice” という對譯例がみえる [Golden 2000, 326]。

物件を説明する例がみえる：<sub>3</sub>sač idgü y[iti] bađ[man tämür-tä l](ükč)[üng]-kä (t)ägir iki [batman] <sub>4</sub>[....] tämür-tä「鐵鍋を製造するための7斤 [の鐵のうち] リュクチュングに至る2斤の……鐵のうち」。同じく「ヤリン文書」に属するCh/U 6954v (=松井 2003, Text C = Matsui 2014b, E8) には、これと平行する文脈で<sub>4</sub>alīm-qa <sub>5</sub>t(ä)gmiš üč bađman kápáz-tä「税として至った3斤の棉花のうち」と記される。さらに、これらを折衷したより詳しい説明として、やはり「ヤリン文書」に属する \*U 9233 (= Matsui 2014b, E5) は、<sub>2</sub>mäl[i](k) bāg-kā birgü lükčüng alīm-īnga tągmiš altı <sub>3</sub>šrīy buyday「メリク=ベグに供出すべき、リュクチュングの税(alīm)として至った6石の小麥」という。すなわち、これらの物件は、いずれもリュクチュング地域の住民に税物として「至る(täg-)」すなわち賦課されるものであると考えられるので、上掲の和譯でも、適宜に解釋を補っている。

**E2r5, bir küri | | quruy üzü:** ここでも、küriとquruyの間の料紙は、文書作成時点ですでに破損脱落していたと推測される。前掲語註E2r4c参照。

### 3. 「みえない」ヤルリグとその歴史的背景

前述のように、ウイグル文供出命令文書の記載は、年月日記載から始まるのが一般的である。しかし、上掲の4件の冒頭は、この年月日記載に先立って、以下のような記載事項を有する点で例外的といえる。

**B3:** <sub>1</sub>Arīq Bökä-ning「アリク=ブケの。」

**B4:** <sub>1</sub>Qorumčī oγul-nung「コルムチ王子の。」

**D20:** <sub>1</sub>Milik Tämür oγul-nung「メリク=テムル王子の。」

**E2:** <sub>1</sub>[.... oγul?-n]lung「[……王子?] の。」

B3・B4・D20は、いずれもモンゴル王族に言及する。また、テキストが破損脱落しているE2も、モンゴル王族や上級支配層に属する人物に言及していたことは確實である〔語註E2r1参照〕。

それでは、この例外的記載は、具体的に何のために記されたのであろうか。以下、既発表のB3・B4の用例に對する代表的な先學の解釋を検討しておく。

まずRadloffは、B3・B4およびそれらと連貼された4件を「領収證」と理解しつつ、冒頭の人名を、「それに対して領収證が発行されたところの人物の姓名 (der Name der Person ..., für die die Quittung ausgestellt wurde)」, つまり「領収證」の受領者とみなした〔USp, 92〕。しかしながら、驛傳馬の供出によるクプチル税の代納命令という本文書の性格・機能からすれば、本文書の受領者は驛傳馬を供出した「バチャガ=タルカンの百戸(内)のボルミシュ=タズ」であるから、Radloffの解釋は成立しない。

またL. V. Clarkは、これらの人名を「命令文書を發行した官吏の名 (the name of the official who issues the decree)」と解釋した〔ClarkIntro, 389〕。しかし、B3・B4に捺された朱方印からは、本文

書は「高昌王總管府」により発行されたと考えられる。そもそも、モンゴル王族が自ら、トゥルファン地域で古ウイグル語の行政命令文書を発行したということも考えづらい。

ここで問題の4文書の目的・機能についてみれば、B3文書は使臣 (ilči), B4文書はブドウ酒係 (borči), D20文書は使臣・侍従 (nökör) へ馬匹や食糧を提供して便宜を供與するものであり、E2文書は使臣 (ilči) が徴収していく各種の物件そのものを供出するものであった。これらの使臣・ブドウ酒係・侍従らは、おそらく、モンゴル王族・支配層によって派遣されたものであり、その際には主君のモンゴル王族からのモンゴル語命令文書を發給されていたであろう。モンゴル皇帝以外のモンゴル王族や貴族・行政官らが、自己の命令文書を持たせて使臣を派遣するということは、帝國の東西でみられた事象である。本稿第1節に掲げたモンゴル語行政命令文書のうち、④⑤⑦などはその実例であり、さらに原文書として現存する類例は他にも少なくない [Mostaert / Cleaves 1952; Mostaert / Cleaves 1962; Weiers 1967 = BT XVI, Nr. 72, 75]。またモンゴル王族とその宮廷・政權の中樞部から發行されたという点では、本稿第1節のペルシア語行政命令文書の諸例 (⑨～⑭) も、これらのモンゴル語文書と同様の性格をもつといえる。

問題のウイグル文供出命令文書B3・B4・D20・E2で便宜を供與される使臣たちもこのようにして派遣されていたとすれば、彼らはトゥルファン地域に到着すると、持参しているモンゴル王族からの命令文書をトゥルファン現地の政廳に提示して指令を與え、それに對應するためにウイグル人官吏がウイグル語で發行したのが文書B3・B4・D20・E2である、と推測できる。

そして、本稿第1節に掲げたモンゴル語 (①～⑦)・ウイグル語 (⑧)・ペルシア語 (⑨～⑭) 行政命令文書にみえる権限附與文言の諸例に鑑みれば、問題の文書B3・B4・D20・E2の冒頭の例外的記載は、供出命令文書により便宜を供與される使臣らが依據するモンゴル上級權力・權威の所在を示す権限附與文言に類するものと考えられる。すなわち、これらの記載は、本來はそれぞれ *Ariq Bökä-ning yarlıy-ındın* 「アリク＝ブケのおおせにより」(B3), *Qorumči oγul-nung yarlıy-ındın* 「コルムチ王子のおおせにより」(B4), *Milik Tāmūr oγul-nung yarlıy-ındın* 「メリク＝テムル王子のおおせにより」(D20), [..... oγul-n]ung yarlıy-ındın 「[……王子]のおおせにより」(E2) などとされるべきものであったと推測できるのである。

しかし、現實には「おおせにより (yarlıy-ındın)」という語句は記されていない。その理由について、筆者は、さらに以下のように推定してみたい。B3・B4・D20・E2文書を作成・發行したトゥルファン地域のウイグル人官吏・政廳は、それらの供出命令文書がモンゴル王子・王族らの權威に由來することを記すにあたり、「おおせ (T. yarlıy ~ M. jarlıy)」の語をモンゴル皇帝の命令に限定するという原則を遵守して、彼らモンゴル王族の命令を「おおせ (T. yarlıy ~ M. jarlıy)」とは稱さなかった。しかし、上級支配層としてのモンゴル王族の命令を、モンゴル語の「ことば (M. üge)」に相當するウイグル語・テュルク語「ことば (söz)」と稱することは、彼らの命令を非モンゴル王族であるウイグル人官吏ら自身の命令と同列に置くことになり、やはり不敬とみなされかねない。そのため、あえて王族の個人名の後に「おおせ (T. yarlıy ~ M. jarlıy)」とも「ことば (M. üge ~ T. söz)」



とも書かないことで、モンゴル皇帝と、それらのモンゴル王族との雙方に對して、敬意を示したのであろう。

本稿第1節にみたように、13世紀末以降には、大元ウルスの直接支配から實質的には離脱した西方諸ウルスの臣僚たちは、自身の直接の主君の命令を「おおせ (T. yarlıy ~ M. jarlıy)」と稱することを忌避しなかった。これと比較すれば、問題の B3・B4・D20・E2 文書を作成したウイグル人官吏・政廳には、唯一至上の最高君主としてのモンゴル皇帝・大元ウルス皇帝の權威が、より強力に認識されていたと考えることができる。

B3・B4文書が発行された憲宗モンケ病没の直前・直後の時期においては、モンゴル皇帝は、なお帝國全域に對して至上の權力を實質的に行使していた。またE2文書が屬する「ヤリン文書」群には、チャガタイ=ウルスの實効支配を示す特徴は確認されないので、1320年代前半まではトゥルファン地域がより直接的には大元ウルスの支配下にあったことを示す [cf. 松井 2003, 53-55]。チャガタイ=ウルス支配下で発行された⑤⑥⑦⑧が皇帝以外のモンゴル王族に「おおせ (T. yarlıy)」の語を用いることと比較すれば、これを回避しているE2文書は、その発行時點において、トゥルファン地域における大元ウルス皇帝の權威・影響力がチャガタイ=ウルスのそれよりも優勢だったという状況をあらためて示すものといえる。

モンゴル王族のメリク=テムルに「おおせ (T. yarlıy)」の語を用いないことからすれば、D20文書の「犬年」の時點においても、トゥルファン地域には大元ウルスの強力な支配が及んでいたはずである。この「犬年」は、至元十一年 (1274) 甲戌・至元二十三年 (1286) 丙戌・大徳二年 (1298) 戊戌のいずれかであり、一方メリク=テムルは至元十三年 (1276) のシレギの亂に伴いカイドゥ勢力に合流する [語註 D20r1 参照]。この點に鑑みれば、D20文書の「犬年」は、メリク=テムルとトゥルファン地域の雙方が大元ウルス支配下にあったことがほぼ確實な至元十一年 (1274) 甲戌に比定するのが最も妥當である。

ただし、『集史 (*Ġāmi‘ al-Tawārīḥ*)』が伝えるように、クビライ治世の末期のウイグル王國領は大元ウルスとカイドゥ・ドゥア勢力に兩屬していたという [Boyle 1971, 286; 陳高華 1982, 282; 杉山 1987 = 杉山 2004, 361; 松井 2008a, 20-22]。實際に、メリク=テムルとその兄でやはりカイドゥ・ドゥア勢力に屬していたヨブクル (Yobuqur ~ Yomuqur) は、時にはアルタイ方面の大元ウルス軍の前線部隊と誼を通じたこともあり、その後ヨブクルは元貞二年 (1296) に大元ウルスに來降している [松田 1983, 34-35; 村岡 1999, 19-20]。このような状況からすれば、至元二十三年 (1286) 丙戌・大徳二年 (1298) 戊戌のいずれかの時點で、カイドゥ・ドゥア勢力の側に屬するメリク=テムルが、最高君主としての大元ウルス皇帝の權威下に服しているトゥルファン地域に、影響力を行使し得たということも、必ずしも不可能とはいえない [cf. Matsui 2014b, 620-621]。すなわち、本D20文書の年代を最終的に決定することはできないことになる。それでも、メリク=テムルの存命時點では、舊ウイグル王國領=ウイグルスタンにおける大元ウルス皇帝の權威の優位が確認できることは、モンゴル時代における當該地域の歴史展開を考える上で重要である。



## おわりに

本稿の内容は、以下のようにまとめられる。

モンゴル時代、「おおせ (M. *jarliq* ~ T. *yarliq* ~ P. *yarliq*)」の語を最高君主としてのモンゴル皇帝・大元ウルス皇帝の命令に限定して用いるという文書行政上の規範・體例は、13世紀末以降の西方諸ウルスでは嚴格には守られなくなり、特にモンゴル王族以外の臣僚が発行した行政命令文書では、皇帝以外のモンゴル王族の命令をもしばしば「おおせ」と稱していた。これに對して、東トルキスタン〜トウルファン地域のウイグル王國領で発行されたウイグル文供出命令文書には、例外的な権限附與文言をもつものが4件あり、そこでは行政命令の直接の權威の所在としてのモンゴル王族の命令をあえて「おおせ (T. *yarliq*)」とも「ことば (T. *söz*)」とも稱さないことで、モンゴル皇帝・大元ウルス皇帝の最高君主としての權威を侵犯することを回避しつつ、當該のモンゴル王族にも敬意を表するという、異例の處理を行っていた。つまり、ヤルリグ (T. *yarliq*) = 「おおせ」の語が文書に「みえない」ことが、逆説的に、ウイグル王國領におけるモンゴル皇帝の權威の唯一性・不可侵性を示すものと考えられるのである。

また、これら4件のウイグル文供出命令文書は、チャガタイ=ウルスの東トルキスタン實効支配を示す特徴がみられず、うち3點は確實に13世紀後半期、残る1點も1320年代以前に屬する可能性が高い。一方、上述のように、チャガタイ=ウルス發行文書ではしばしばチャガタイ家王族の命令が「おおせ (M. *jarliq* ~ T. *yarliq*)」と稱される。これらを勘案すると、権限附與文言においてモンゴル王族の命令を「おおせ (T. *yarliq*)」とも「ことば (T. *söz*)」とも稱さない書式は、チャガタイ=ウルスの東トルキスタン實効支配が本格化する1320年代後半より以前に特徴的なものとして、時代判定の有効な指標となり得るといえる。

以上の行論では推測に頼らざるを得ない部分も多く、また西方のペルシア語年代記資料・古文書資料については、なお筆者の知見の及ばない點も多々ある。専門家のご批正を乞うものである。

ところで、本稿で提示した供出命令文書のうち、B3・D20の2件は、アルタイ地域に據點を有したアリク=ブケ・メリク=テムル父子が東トルキスタンのウイグル王國領にまで政治的な影響力を行使していたことを示している。すでに指摘されているように、ビシュバリク出身のウイグル人高僧の安藏 (Antsang) は、アリク=ブケの命令によって『華嚴經』を漢語からウイグル語に翻譯し、いわゆる「道佛論争」に際しても道教の虚妄をアリク=ブケに訴えている。また、クビライとアリク=ブケの帝位繼承戦争に際しては、アリク=ブケに投降をうながす使節として派遣されたが、成功せずクビライのもとに歸還したと伝えられる [Oda 1985; 『至元辨偽録』卷3 (北京圖書館古籍珍本叢刊 77, 書目文獻出版社, 511); 『程雪樓集』卷9・「秦國文靖公神道碑」]。安藏らウイグル人佛教徒がアリク=ブケの側近には少なくなかったことが推測できる。ただし、このような人脈がその後のアリク=ブケ家とウイグル王國領との関係に與えた影響は未解明である<sup>15</sup>。また、モンゴル高原

<sup>15</sup> ただし『集史』に記録されたアリク=ブケの末子メリク=テムルの主要な將相には、ウイグル出身者は見受けられない [松田 1988, 91-92]。

史の立場からは、アルタイ西麓・南麓域と高昌・バルクル (Bars-Köl > Barkul > 巴里坤) など東部天山地域との交通ネットワークが注目されている [村岡 2003, 45]。本稿で扱ったウイグル文供出命令文書の内容は、このようなモンゴル帝國政治史・交通史の視点からも再検討していく必要がある。

## 参考文献

安部 健夫 1955:『西ウイグル國史の研究』彙文堂書店。

敖特根 (Otgon) 2006:「莫高窟北區出土“阿剌忒納失里令旨”殘片」『敦煌學輯刊』2006-3, 28–40.

敖特根 (Otgon) 2010:『敦煌莫高窟北區出土蒙古文文獻研究』民族出版社。

Arat, Reşid Rahmeti. 1964: Eski Türk hukuk vesikaları. *Türk Kültürü Araştırmaları* 1, 1–53.

BBAW = Berlin-Brandenburgische Akademie der Wissenschaften.

Boyle, John Andrew. 1971: *The Successors of Genghis Khan*. New York.

BTT XVI = Dalantai Cerensodnom / Manfred Taube, *Die Mongolica der Berliner Turfansammlung*. Berlin, 1993.

陳 高華 1982:「元代新疆史事雜考」『新疆歷史論文續集』新疆人民出版社, 274–294.

Chwolson, Daniil A. 1897: *Syrisch-nestorianische Grabinschriften aus Semirjetschie*, Neue Folge. St. Petersburg.

Clark, Larry Vernon. 1975: On a Mongol Decree of Yisün Temür (1339). *Central Asiatic Journal* 19-3, 194–198.

ClarkIntro = Larry Vernon Clark, *Introduction to the Uyghur Civil Documents of East Turkestan (13th–14th cc.)*. Ph.D. Dissertation of Indiana University. Bloomington, 1975.

Claeves, Francis Woodman. 1953: The Mongolian Documents in the Musée de Téhéran. *Harvard Journal of Asiatic Studies* 16-1/2, 1–107.

CTD = Maḥmūd al-Kāşğarī, *Compendium of the Turkic Dialects (Dīwān Luğāt at-Turk)*, 3 vols. Tr. and ed. by R. Dankoff / J. Kelly. Cambridge (MA), 1982–1985.

ED = Gerard Calson, *An Etymological Dictionary of Pre-Thirteenth-Century Turkish*. Oxford, 1972.

Franke, Herbert. 1965: A 14th Century Mongolian Letter Fragment. *Asia Major* (N. S.) 11-2, 120–127, +1 pl.

嘎日迪 (Garudi) 2004:「敦煌莫高窟北區出土蒙古文和八思巴文文獻」彭金章・王建軍・敦煌研究院 (編)『敦煌莫高窟北區石窟』第3卷, 文物出版社, 397–419.

Golden, Peter B. 2000: *The King's Dictionary: The Rasūlid Hexaglot*. Leiden / Boston / Köln.

GSR = Bernhard Karlgren, *Grammata Serica Recensa*. Stockholm, 1957.

羽田 亨 1925:「回鶻譯本安慧の俱舍論實義疏」池内宏 (編)『白鳥博士還曆記念東洋史論叢』岩波書店。

羽田 亨 1958:『羽田博士史學論文集・下卷言語宗教篇』東洋史研究會。

Herrmann, Gottfried / Doerfer, Gerhard. 1975: Ein persisch-mongolischer Erlass des Ġalāyeriden Šeyḥ Oveys. *Central Asiatic Journal* 19, 1–84, + m. pls.

本田 實信 1967:「阿母河等處行尚書省考」『北方文化研究』2, 89–110.

石田 幹之助 1934:「『至元譯語』に就いて」『東洋學叢編』1.

石田 幹之助 1973:『東亞文化史叢考』東洋文庫。

卡哈爾=巴拉提 (Kahar Barat)・劉 迎勝 1984:「亦都護高昌王世勲碑回鶻文碑文之校勘與研究」『元史及北方民族史研究集刊』8, 57–106.

Kara György. 1990: *Zhiyuan Yiyu: Index alphabetique des mots mongol*. *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae* 44-3, 259–277.

久保 一之 2012:「ミール・アリーシールと“ウイグルのパフシ”」『西南アジア研究』77, 39–73.

Lessing, Ferdinand D. 1960: *Mongolian-English Dictionary*. Berkeley / Los Angeles.

- 李 經緯 1996:『吐魯番回鶻文社會經濟文書研究』新疆人民出版社。
- Ligeti, Louis. 1966: Un vocabulaire sino-ouïgour des Ming: le *Kao-tch'ang-kouan yi-chou* du Bureau des Traducteurs. *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae* 19-2, 117-199.
- Ligeti, Louis. 1972: *Monuments préclassiques* 1, XIII-XIV siècles. Budapest.
- Ligeti, Louis / Kara, György. 1990: Un vocabulaire sino-mongol des Yuan: *Le Tche-yuan Yi-yu*. *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae* 44-3, 100-22.
- 松田 孝一 1983:「ユブクル等の元朝投降」『立命館史學』4, 28-62.
- 松田 孝一 1988:「メリク・テムルとその勢力」『内陸アジア史研究』4, 91-102.
- 松田 孝一 1996:「オゴデイ諸子ウルスの系譜と繼承」『ペルシア語古寫本史料精査によるモンゴル帝國の諸王家に關する總合的研究』JSPS 科研費 (No. 05301045) 報告書, 21-65.
- 松井 太 1997:「カラホト出土蒙漢合璧稅糧納入簿斷簡」『待兼山論叢』史學篇31, 25-49.
- 松井 太 1998a:「モンゴル時代ウイグルスタン稅役制度とその淵源」『東洋學報』79-4, 026-055.
- 松井 太 1998b:「ウイグル文クトルグ印文書」『内陸アジア言語の研究』13, 1-62, +pls. I-XV.
- 松井 太 2002:「モンゴル時代ウイグルスタンの稅役制度と徵稅システム」松田孝一(編)『碑刻等史料の總合的分析によるモンゴル帝國・元朝の政治・經濟システムの基礎的研究』JSPS 科研費 (No. 12410096) 報告書, 87-127.
- 松井 太 2003:「ヤリン文書」『人文社會論叢』人文科學篇10, 51-72.
- 松井 太 2004:「モンゴル時代の度量衡」『東方學』107, 166-153.
- 松井 太 2008a:「ドゥア時代ウイグル語免稅特許狀とその周邊」『人文社會論叢』人文科學篇 19, 13-25.
- 松井 太 2008b:「東西チャガタイ系諸王家とウイグル人チベット佛教徒」『内陸アジア史研究』23, 25-48.
- Matsui Dai. 2009: Bezeklik Uigur Administrative Orders Revisited. 張定京・阿不都熱西提=亞庫甫(編)『突厥語文學研究: 耿世民教授八十華誕紀念文集』中央民族大學出版社, 339-350.
- 松井 太 2010:「西ウイグル時代のウイグル文供出命令文書をめぐって」『人文社會論叢』人文科學篇 24, 25-53.
- Matsui Dai. 2014a: Old Uigur Toponyms of the Turfan Oases. In: Elisabetta Ragagnin / Jens Wilkens (eds.), *Kutadgu Nom Bitig: Festschrift für Jens Peter Laut zum 60. Geburtstag*, Wiesbaden, 265-294.
- Matsui Dai. 2014b: Dating of the Old Uigur Administrative Orders from Turfan. In: M. Özkan / E. Doğan (eds.), *VIII. Milletlerarası Türkoloji kongresi (30 Eylül - 04 Ekim - İstanbul) bildiri kitabı*, Vol. IV, İstanbul, 611-633.
- 松川 節 1995:「批評・紹介: D. Cerensodnom & M. Taube, *Die Mongolica der Berliner Turfansammlung*」『東洋史研究』54-1, 105-122.
- 宮 紀子 2012:「Mongol baqši と bičikči たち」窪田順平(編)『ユーラシアの東西を眺める』京都大學文學研究科, 37-64.
- 宮 紀子 2014:「ジャライル朝スルタン・アフマドの金寶令旨より」杉山正明(編)『續・ユーラシアの東西を眺める』京都大學文學研究科, 15-52.
- MKT = 內蒙古大學蒙古學研究院蒙古語文研究所『蒙漢詞典(增訂本)』內蒙古大學出版社, 1999.
- 護 雅夫 1952a:「ネケル考」『史學雜誌』61-8, 100-105.
- 護 雅夫 1952b:「ネケル考序說」『東方學』5, 10-40.
- Mostaert, Antoine / Cleaves, Francis Woodman. 1952: Trois documents mongols des Archives Secrètes Vaticanes. *Harvard Journal of Asiatic Studies* 15-3/4, 419-506
- Mostaert, Antoine / Cleaves, Francis Woodman. 1962: *Les Lettres de 1289 et 1305 des ilkhan Aryun et Oljeitü à Philippe le Bel*. Cambridge (MA).
- 村岡 倫 1985:「シリギの亂」『東洋史苑』24/25, 307-344.

- 村岡 倫 1992:「オゴデイ・ウルの分立」『東洋史苑』39, 20–43.
- 村岡 倫 1999:「オルダ・ウルスと大元ウルス」『東洋史苑』52/53, 1–38.
- 村岡 倫 2003:「モンゴル西部におけるチンギス・カンの軍事據點」『龍谷史壇』119/120, 1–61.
- Oda Juten 小田壽典 1985: On the Uigur Colophon of the *Buddhāvataṃsaka-sūtra* in Forty-Volumes. 『豊橋短期大學研究紀要』2, 121–127.
- 大塚 修 2014:「史上初の世界史家カーシャニー」『西南アジア研究』80, 25–48.
- Özyetgin, Ayşe Melek. 1996: *Altın Ordu, Kırım ve Kazan sahasına ait yarlık ve bitiklerin dil ve üslup incelemesi*. Ankara.
- Özyetgin, Ayşe Melek. 2000: Altın Ordu Hanı Toktamış'ın Bik Hâci adlı kişiye verdiği 1381 tarihli tarhanlık yarlığı. *Türkoloji Dergisi* 8-1, 167–192.
- Pelliot, Paul. 1936: Les documents mongols du Musée de Teherân. *Athâr-é Īrân* 1, 37–44, +2 pls.
- Pelliot, Paul. 1938: Le nom du *ḫwārizm* dans les textes chinois. *T'oung Pao*, 2. s. 34-1/2, 146–152.
- Pelliot, Paul. 1944: *Qubčiri - qubčir et qubči'ur - qubčur*. *T'oung Pao*, 2. s., 37-5, 153–164.
- PUM = Gottfried Herrmann, *Persische Urkunden der Mongolenzeit*. Wiesbaden, 2004.
- Raschmann, Simone-Christiane. 2008, Baumwoll-Nachlese. Vier alttürkische *böz*-Dokumente aus dem ARAT-Nachlaß (Istanbul). 『内陸アジア言語の研究』23, 121–150.
- Rybatzki, Völker. 2006: *Die Personennamen und Titel der Mittelmongolischen Dokumente*. Helsinki.
- 志茂 碩敏 1995:『モンゴル帝國史研究序説』東京大學出版會。
- 志茂 碩敏 2013:『モンゴル帝國史研究：正篇』東京大學出版會。
- Soudavar, Abdula. 1992: Farmān of the Il-Khān Gaykhātu. In: Abdola Soudavar, *Art of the Persian Courts*, New York, 34-35.
- Steingass, F. J. 1892: *A Comprehensive Persian-English Dictionary*. London.
- 杉山 正明 1982:「幽王チュベイとその系譜」『史林』65-1, 1–40.
- 杉山 正明 1987:「西暦1314 年前後大元ウルス西境をめぐる小札記」『西南アジア研究』27, 24–56
- 杉山 正明 1990:「元代蒙漢合璧命令文の研究」『内陸アジア言語の研究』5 [1989], 1–31, +2 pls.
- 杉山 正明 1995:「大元ウルスの三大王國 (上)」『京都大學文學部研究紀要』34, 92–150.
- 杉山 正明 2004:『モンゴル帝國と大元ウルス』京都大學學術出版會。
- 田 衛疆 1994:「元代新疆“站赤”研究」『中國辺疆史地研究』1994-1. 30–35.
- Tietze, Andreas. *Tarihi ve Etimolojik Türkiye Türkçesi Lügati*, 2 vols. Istanbul / Berlin, 2002–2007.
- Tixonov, Dmitrij Ivanovič 1966: *Xozjajstvo i obščestvennyj stroj uĵurskogo gosudarstva X-XIV vv.* Moskva / Leningrad.
- TMEN = Gerhard Doerfer, *Türkische und mongolische Elemente im Neupersischen*, 4 vols. Wiesbaden, 1963–1975.
- TU = Abū al-Qāsim ‘Abd Allāh b. Muḥammad al-Qāšānī, *Tārīḫ-i Ūlġāyātū*. MS. İstanbul, Aya Sofya Kütüphanesi, 3019/3, fol. 135–240.
- Tuguševa, Lilija Yusufzanova. 2013: *Uĵurskie delovye dokumenty X–XIV vv. iz Vostočnogo Turkestana*. Moskva.
- Tumurtogoo, D. 2006: *Mongolian Monuments in Uighur-Mongolian Script*. Taipei.
- Tumurtogoo, D. 2010: *Mongolian Monuments in 'Phags-pa Script*. Taipei.
- USp = Wilhelm Radloff, *Uigurische Sprachdenkmäler*. Ed. by Sergej Malov. Leningrad, 1928.
- VOHD 13,21 = Simone-Christiane Raschmann, *Alttürkische Handschriften*, Teil 13: *Dokumente*, Teil 1. Stuttgart, 2007.
- VOHD 13,22 = Simone-Christiane Raschmann, *Alttürkische Handschriften*. Teil 14: *Dokumente*, Teil 2. Stuttgart, 2009.
- VWTD = Wilhelm Radloff, *Versuch eines Wörterbuches der Türk-Dialecte*, 4 vols. St. Petersburg, 1893–1911.
- Weiers, Michael. 1967: Mongolische Reisebegleitschreiben aus Čayatai. *Zentralasiatische Studien* 1, 7–54.
- 吉田 順一・チメドドルジ (編) 2008:『ハラホト出土モンゴル文書の研究』雄山閣。
- Zieme, Peter. 1980: Uigurische Pacht Dokumente. *Altorientalische Forschungen* 7, 197–245.

【付記】 本稿は、JSPS 科研費 No. 26300023, No. 26580131, No. 26284112, 2014 年度 JFE21 世紀財団・アジア歴史研究助成（2014: 6）および東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同利用・共同研究課題「新出多言語資料からみた敦煌の社会」による研究成果の一部である。また、本稿の内容の一部は、2011 年 7 月 16-17 日に開催された国際ワークショップ Comparative Research on Iranian-Islamic and Mongolian-Chinese Aspects of the Ardabil Documents in the Ilkhanid-Mongol Period における報告に基づく。席上で有益なご教示を賜った諸氏に深謝する。

Fig. I

B1 + B2 + B3 + B4 = SI 6544

[St. Petersburg Institute of Oriental Manuscripts, Russian Academy of Science]

*Документы разного содержания*



Pa 36 (a-b)  
SI Uig 14



Pa 36 (c-d)  
SI Uig 14

Reproduced from Tuguševa 2013, 317



**Fig. II**

**D20 = U 5790 + \*U 9261 (T III 66) [BBAW]**



**1. U 5790 currently preserved in BBAW**  
(<http://turfan.bbaw.de/dta/u/images/u5790seite1.jpg>)

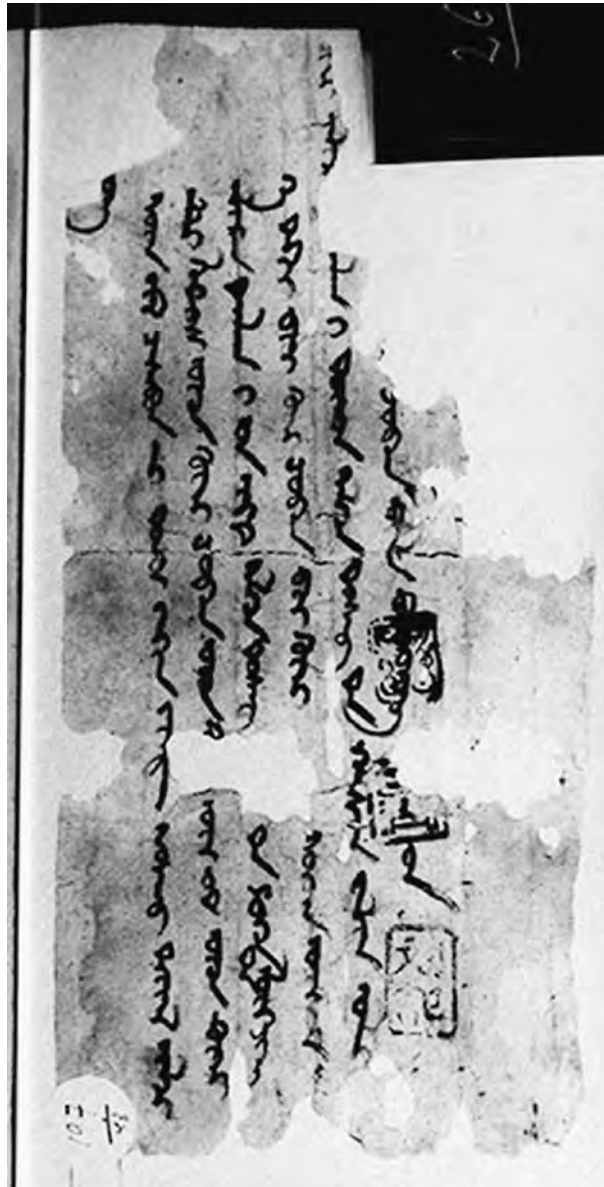


**2. Photographic reproduction**  
taken by Reşid Rahmeti Arat

Depositum der BERLIN-BRANDENBURGISCHEN AKADEMIE DER WISSENSCHAFTEN  
in der STAATSBIBLIOTHEK ZU BERLIN - Preussischer Kulturbesitz, Orientabteilung  
[with the courtesy of Prof. Osman Fikri Sertkaya]



Fig. III  
E2 = \*U 9234



[Reproduced by the courtesy of Prof. Osman Fikri Sertkaya]